

随

想

＊
吉田精一
著作集
別卷
Ⅰ

桜楓社

吉田精一著作集 別卷一

随 想

昭和五十六年十一月十二日 第一刷発行

定価 二八〇〇円

著 者 吉 田 精 一

発行者 及 川 篤 二

発行所 (株) 桜 楓 社

東京都千代田区猿樂町二一八一三

電話 東京 03 二九五―八七七(代表)

振替東京六一八〇二〇郵便番号一〇一

© 吉田精一 一九八一年

Printed in Japan

落丁・乱丁本はお取り替え致します。

吉田精一著作集 別卷一 目次

卒業論文傑作集―当世大学生気質―

9

古事記は肉体文学か

19

雪子と伸子

35

昔の俠客・いまのやくざ

43

やくざの生態 43 俠客のおこりならびに中国の俠客 45
 ことグレン隊のこと 51 強きを助け弱きを挫く 52

日本の俠客と旗本やっこのこと 47

町やっ

風流江戸小咄

55

過ぎたるは及ばざるが如し 55 恐妻家 57 ガラマサどん 58 然らば御免 59 五人組 61 堂々た
 る密夫 63 自衛隊幹部 65 雪隠のはねよけ 66 有料便所繁昌伝 67 宝舟炮焙のいる神もあり 68
 神も仏も 69 物も使しよう 70 糞の目きき 71 つまらぬ遠慮 73 看板に偽り 74 サービス過剰 75
 貝は異なもの、味なもの 76 三本目の足 77 昭和小咄夜の花 79 ししがんこう 82 魂入りし張
 形の名作 84 美学の中心 86 利用法 88 親子どんぶり 90 娘十八 92 蛇、穴に入る 94 無形

II

文化財 95
 行きすぎ 96
 野良出合 98
 恋の名歌 99
 喧嘩すぎでの 100
 少ないかな賢 102
 強弱
 二筋道 105
 女の評判 106
 危いもの 108
 墓まいり 109
 よい女房をもてば 111
 仏の好物 112
 どっち
 が 114
 捲かぬ時計 116
 居留守 117
 無心 119
 はり札 120
 紙入 121
 風呂桶 123
 数とり 124
 磁
 石 125
 相見互い 126
 ねぼけ 127
 小袖 128
 所変れば品変る 129
 蚤とりの名人 130
 草双紙 131
 ほとと
 薫風 132
 夫婦喧嘩 133
 蛇のめいわく 134
 たこやくし 135
 おならの伝 136
 おいらん 137
 ほとと
 ぎす 138
 女郎の屁 139

昭和九年

散文の本質 143

花桜折る少将について 147

昭和十一年

国文学界の二傾向 155

昭和十六年

国文学の方向について 163

昭和二十四年

近代の女性 168

昭和二十八年

堀辰雄 170

昭和二十九年

茂吉の書簡など 179

昭和三十年

競走者 184
 忘れられない文章 185

へその辺りが

揺ゆくなる 186
 卒論に手を加えて 188

昭和三十一年

透谷全集について 189

蝸牛庵訪問記 201

昭和三十二年

自分を書きとめておくこと 206 論文の進め方と

め方²¹⁴ 天外・風葉・綺堂・青果²²⁷

昭和三十三年

文学と道徳²⁴⁶ 川端康成論²⁴⁹

昭和三十四年

西の京の秋²⁶¹

昭和三十五年

ヨーロッパ女性視きある記²⁶³

昭和三十六年

即興詩人のあとをたずねて²⁷² カプリの旅²⁷⁶

昭和三十七年

食べものと本²⁸⁰ 惨禍のなかの玄米飯²⁸³

私²⁸⁶ 「うつば」漫感²⁹⁰ 歌と

昭和三十八年

ぶきみなものへの追求²⁹⁴

伝統の保存²⁹⁹ 近代

文学の成熟³⁰⁴

昭和三十九年

ミンガンだより³⁰⁸ アメリカ人の親切³¹⁰ 名著

鑑賞・源氏物語³¹⁴ 「君が代」論の打ち止め論³¹⁶

昭和四十年

アメリカの日本料理³²⁰ 谷崎潤一郎³²² 文明開

化³²⁵ 生誕百年を迎える人々³³⁰

昭和四十二年

勝本清一郎氏の思い出³³⁴ 時枝学説をめぐって³³⁷

昭和四十三年

明治百年の春³⁴¹ 久松先生と文学評論史³⁴² 狭

心症と酒³⁴⁴ 文明開化³⁴⁶

昭和四十五年

ハワイの島々の旅 349

些細なことの悲喜 350

昭和四十六年

私の卒業論文 354

ハワイ大学と日本 356

ほんと

の出会い 357

昭和四十七年

前田夕暮寸感 360

能の三名人 362

川端康成の文

体 364

川端康成氏をしのぶ 376

源氏物語鑑賞の

さまざま 381

江戸語・明治語など 384

昭和四十八年

自由民権運動家の裏側 389

茂吉の文化勲章受賞祝

賀会 390

二人の釣り人 394

昭和四十九年

チャタレイ裁判など 397

「新泉奇談」はなぜ 当

時未発表に 401

窪川鶴次郎氏の印象 404

昭和五十年

昔を今に 411

宇都野研氏の思い出 414

昭和五十一年

現代語訳源氏の感興 416

蜻蛉集の豪華本 426

三日見ずんば 427

中島敦の思い出 430

久松先生

と近代文学研究 433

詩的で瀟洒な鮎 439

昭和五十四年

震災に伴う火事 443

ひと、本に会う 445

古書探

しと私 448

興趣を添える私生活の記述 451

昭和五十五年

小説の読み方 456

昭和五十六年

観能五十年 463

旅にかぎる 465

*

解説にかえて 半世紀の酒友・吉田精一

濱田義一郎

卒業論文傑作集

——当世大学生気質——

「小泉ハチクモ」

どこの大学でも五月はじめになると、翌春卒業する学生達から、卒業論文の題目を提出させ、研究方向や方法などについて懇談する。

これはある私立大学の英文学教室での話である。例によって私は「モームをやります」とか、「僕はハックスレーです」とかいふ連中のなかに一人、

「ハチクモをやります」

というのであった。

「ハチクモ？ 知らんね。アメリカの作家かね」

「いいえ、日本人です。コイズミ・ハチクモです」

さすがの教授も噤然としてしばらくこの学生の顔をながめていたという。恐るべき「小泉ハチクモ論」を読まされることを予想してぞっとしたのかも知れない。

小泉八雲全集は勿論翻訳がある。この学生はホンヤクのみによろうとするけなげな決心をし、原文原語は

一冊も見なかったのであろう。労を少くして功を多く収めようというのは、聡明なる当代学生のしばしば用いる方法である。国立大学たる東大に於いても、いにしえより高見順、新田潤両秀才の如く、もっぱら翻訳の多く出ている作家をさがし出して来て、外人教師を驚かせる名論文を作成した例もある。しかし当時は何といつても外国文学科の論文はすべて当該国語で物する習慣であつたから、ハチクモ先生の如く原作者のプロバ・ナウンも読めない学生などが出るはずがない。原書を相当に齧らなければならなかつたのである。

だが、ひとり外国文学科の学生のみではない。国文畑にもこの種の話柄はざらにある。数年前のことだが、日本の女秀才を代表する三つの大学の内の一つ——ボン女（日本女子大をかくいう由）トン女（東京女子大）お茶大（お茶の水女子大）のどれかは忘れた——の国文科の学生が私の所へ来た。講演の依頼が主であつたが、序に自分の卒業論文の指導も頼みたいという。話の中に「シラトリ」という名がしばしば出る。

「シラトリはかういつてゐますが……」という調子である。

シラトリは多分詩人の白鳥省吾しらとりしやうごであらう、と思つて聞いていた。だが、どうも変だ。

「へえ、シラトリさんがそんなことを云つてゐますか？」

そのうちに、ようやくわかつた。シラトリは白鳥省吾でなく、正宗シラトリであつた。いかにも国文科の女子学生らしく、優にやさしい呼び方ではある。辛辣な批評を以て鳴る正宗白鳥先生も正宗シラトリと名乗ると、佐々木信綱おほしき大人の如き大宮人おほみやびとを思わせる閑雅悠長な面影を帯びて来る。

雅号をやまとよびにする場合もあることはあるので、伊良子清白いらこせいびやく、蒲原有明わらひありあけの例もある。しかしこのでんで、尾崎モミヂだの、樋口ヒトハだの、岩野アワナリだのがぞく／＼出るとなると、地下の諸先生はあれは俺のことかい、あらいやだわ、と目をまるくするだらう。由来明治時代の日本人は西洋人の名前を奇妙キテ

レツなよび方をして来た。シヨパンをチョビンと称した例は有名だが、シヨオペンハウエルをスコペンハウエル、ゲーテをゴート、チェホフをチェトコフと呼んだりした。明治三十七年頃の雑誌「太陽」にはチェトコフ作、正宗シラトリ訳の一篇の小説が厳然とのっている。

これは早稲田大学の暉峻康隆君の話だが、大学院の入学試験（？）に永井荷風を出したところ、ナガイナリカゼとルビをふったのがいたそうだ。ナガイニフウにはしばしばお目にかゝるが、ナリカゼは珍らしい。出典を考えてみると「稲荷」の「ナリ」から来たらしい。この男の連想力は相当のものである。古典ばかり読んでいると、みやびない方が身につくのである。

しかし優にやさしい云い方をする御当人が必ずしも精神肉体ともに大宮人のようにゆうちゅうともかぎらない。さきのシラトリ女史の如きはいにしへの板額もかくやと思われる女丈夫型の面だましいで、かくの如きたけだけしき女性に堂に満ちている有様を想像しただけでも、美的感覚が鋭くして気の弱い私は氣萎え心ちぢんで、卒倒しそうだ。で、講演はひらに御免蒙った。

論文書けど理解せず

さて、近代文学大流行の当世である。国立国語研究所長西尾実先生監修するところの「日本文学史辞典」が、四千五百首の歌をふくむ万葉集よりも日本一の大小説源氏物語よりも、日本一の短篇作家井原西鶴よりも、二歌集と一詩集とすこしの評論をのこし二十いくつで死んだ石川啄木に、多くの紙数をさいている御時世である。

戦争中は日本の近代文学の研究はとくべつに圧迫されたというわけでもあるまいが、国文学の卒業論文な

どに近代を扱うものは少かった。近代の超尠などというモットオが、まだ「近代」になり切っていない日本でさげばれ、一部の古典のみが狂信的に崇ばれた反動として、戦争が終るとなると、とたんに国文学の方面でも近代文学の研究が盛になった。

ちかごろの学生は随分力をとりかえして来たが、一、二年前までは、大体に於いて外国語の力も弱く、又古典の読解力も弱かった。それに加えて漢文の力は今日でもめっきり落ちている。何がそれではプラスになっているかといえば、理屈をいうことで、批判力はたしかに強くなった。

何しろ昔は旧制の高等学校(大学豫科)で三年、大学で三年、合せて六年外国語をやるから、中学でやらなかった新しい外国語もじっくり身についたわけだ。今はそれが四年だから、年期を入れなければ上達しない語学の力は弱いのが当然だ。近ごろは東大でも resume は外国語で書かせるが、論文そのものは日本語である。何故昔のように全部外国語で書かせないのかと、私はある日フランス文学の渡辺一夫さんにたづねて見た。すると温厚なること羊の如く、当代の柳下惠の風のある渡辺教授は、すこし口ごもりながら、

「でも……辛いですよ」と云った。

某私立大学の英文科の教授にきくと、やはり全然辛いそうである。何しろ英語は書いてあるが英文にはなっていない。意味を判読する為に頭が痛くなるようなものが多い。「推理小説」見たいなもので、教師の方の推理力の養成にはなるそうである。

私は近代文学を専攻した学生には、口頭試問でよく文法のことを聞いた。できない。彼等は苦しがつてほかのことを聴いてくれという、そこで別のことをきく。ここに堂々たる島崎藤村論を書いた学生がある。その論中に詩が引用してある。

しろがねのふすまの岡辺

日に溶けて淡雪ながる。

「しろがねとは何だね」

「鉄のことです」

「鉄？」

「あ、金のことです」

こういう調子のがたまにいる。「ふすま」とは何だ、ときくと、「馬や牛に食べさせる飼料のことです」と答える。

こんなのは例外な方だが、自分で引用した文章の意味がよく分っていないのはザラだ。

尾崎紅葉論をやった学生に「金色夜叉」の冒頭の一節を読ましてみる。或は樋口一葉の論者に「たけくらべ」の一章を訳させてみる。出来るものは殆んどいない。

九重の天、八際の地、始めて渾沌の境を出でたりと雖も、万物未だ尽く化生せず、風は試に吹き、星は新に輝ける一大荒原の、何等の旨意も、秩序も、趣味も無くて、唯濫に貌く横はれるに過ぎざる哉。

これが「金色夜叉」の冒頭の一節で、いうまでもなく最も大衆的な新聞小説であった。今とは大分様子がちがうが、いやしくも大学を出ました、明治文学も専攻しました、という学生が、この程度のものを、しかも自分が論文の題目としたものを、読めなくては困るのである。

併し彼等は読めなくとも、その作家の現代的意義、というようなことは、ちゃんと論じられる。その点はひやかしてなく、えらいものである。

どこの時代でもそうだが、本格的に研究するとなると中々ムツかしいのである。明治大正の文学を研究するには、古典一通りの常識はうに及ばず、直接先立つ近世三百年の江戸文学についての理解と知識は欠き得ないものである。又ことに明治の評論類を読むには漢籍の力も相当要る。それに西洋文学に対する知識や、外国語の教養も勿論必要である。純然たる翻訳や翻案をそっくり創作として出して知らぬ顔をしている大家が、明治大正には案外多いから、それを見抜く力がなくてはならぬ。

今日は多少とも比較文学的素養がないと、少くとも明治時代の文学には物が云えない。それに自然主義とか浪漫主義とか、象徴主義とかいうことばを使う以上、外国のそれとの比較は研究者の予備知識でもあれば前提ともなる。それらの研究書は殆んど翻訳がないから、直接原書について読むだけの語学力はもっていないなくてはならぬ。

このほか哲学、美学、社会学、経済学等の基礎教養も欠かし得ないもので、それが時代が下れば下るほど、広汎な教養を要求されるのである。

近代文学をやるうとする学生は大体に於いて頭がよく、文学がわかり、批評も鋭いという学生が多い。もしくは「頭がよく、文学がわかる」と自認している者が多い。事実として、彼等が物する論文のすぐれたものには、時々我々、ことに私のような魯鈍な人間に、頭を垂れさせるものがしばしばある。

彼等は多くの今日に於ける問題意識を以て過去にのぞみ、客観的な過去の認識、というだけには甘んじない。そのために一面的になる傾きはあるが、古典を選ぶものが、殆んどそうした意識にとぼしく、いわば真理の為の真理を追うに忙しいのと好対照である。